特集
煉 瓦

MESSAGE 煉瓦の魅力

高山登志彦
TAKAYAMA Toshihiko

プロフィール
1968年山口県生まれ。株式会社高山煉瓦建築デザイン代表。18歳の時に煉瓦職人として弟子入り。祖父、父と職人家系の三代目を継承する。父・彦八郎が建築家・鬼頭梓の煉瓦建築を手掛けており、18歳の時に鬼頭氏の煉瓦に対する話を直接聞いて感銘を受けた事が煉瓦職人を極めようと思った理由。30代の頃イギリスに何度も滞在し、本場の職人の技術とセンスを学ぶ。主に親方・職長として携わった建築は、信濃町煉瓦館、風の丘斎場、洲本図書館、晴海トリトンスクエア、函館市立図書館、京都立命館大学朱雀校舎等。最近では勝浦市芸術文化交流センター Küste（キュステ）や上州富岡駅がある。座右の銘は「職人は自ら提案し、デザインし、最高のパフォーマンスを残さなければならない」。

誰しも子供のころ、積み木で遊んだ記憶があると思う。木製の積み木であれLEGOブロックであれ、何かを組み積み重ねていくという遊びに夢中になった体験は、幼心の記憶の片隅に残っているはずだ。ただ私の場合は、その積み木が直方体の焼き固まった土の塊、つまり煉瓦であった。

代々煉瓦職人を継承している当家では、家のあちらこちらに煉瓦が転がっており、子供にはやや大きく重いその直方体を両手で持ち上げ、積み木がわりに遊んでいた。煉瓦職人になった今でも多様多種な積み方に挑戦し、夢中になって煉瓦を積んでいる自分は幼少期のころと何ら変わってないように思える。様々なデザインを造り出す事が可能なこの素材は、常に私を夢中にさせてくれる。

そんな私に向かって、父がよくかけていた言葉が「重さを味方にしろ。重力に逆らうな」だ。当然、幼少の私には最初何を言われているのかサッパリ分からなかったが、積み重ねていくうちに重さ、つまり重力というものへの感覚を子供ながらに掴めた事を、今でも鮮明に覚えている。煉瓦という積み木を交互に重ねていくことにより頑丈になり、上の積み木から伝わる重みと厚さによって安定し、多様な積み方が可能になることを知った。

そういった幼少期を過ごしてきたせいか、職人となった現在でも、煉瓦積みや石積み等しっかりと大地に足を据えて立ち上がっている素材をみると妙に安心感をもつ。逆にタイルやパネル等、壁にしがみついている素材をみるとどうしても落ち着かない。ロッククライミングのように岩に力一杯へばり付いているわけだから、力尽きてしまうと落下という結末が待っている。こうして普通に立っていられるのも重力があるからであり、その重力に逆らう限りはいつか限界がやってくる。

昨今、わが国の建築素材をみていると厚く重いものを遠ざけ、薄く軽いものが主流となっている。地震大国と経済活動からはそうならざるを得ない事は理解出来るが、もう少し重力という原理原則に従い、厚く重い物への魅力を探ってほしい。

煉瓦も齢をとっていくが、故意に取り壊されない限り、煉瓦は我々人間より遥かに長寿命だと言える。現存している明治初期の多くの煉瓦建築や土木構造物が、これからも存在し続けることは想像に難くない。古い煉瓦構造物は、経年変化による汚れやくすみで新築当時の体裁は成していないが、その劣化さえも味方につけ、煉瓦ならではの重厚感と風格を醸し出している。この風格は、長い時に磨かれてこそ現れてくるものであるが、人間の齢のとり方によく似ている。

山や森、緑のなかに美しく映え、都会のコンクリートジャングルの中でも凛として立ち続ける煉瓦建築・構造物は、見る人の五感を刺激し、安らぎや温もりを与え続けているように思えてならない。煉瓦のように自然と時が手を加え、時代を重ねるにつれて風格や深い味わいが現れてくる素材はそうそう無い。

現在、我々煉瓦職人の多くは煉瓦を積めるしタイルも貼れる。国内での煉瓦建築が圧倒的に少ないため、両方の技術を備えていないと死活問題になるからだ。現在、RC構造の普及によって煉瓦構造はほぼ絶滅しており、RC構造の表面に化粧材として煉瓦を積む工法が一般的になっていて、この先も大きな変化は無いものと思われる。

しかしながら、2014年に施工管理で携わった上州富岡駅舎の煉瓦積みは、本来の煉瓦が持っている特色を十分に活かし、化粧だけで無く構造体の一部として煉瓦が機能した。こうした例のように、構造や機能の一環として煉瓦という素材が使われ始めると、明治・大正期のように、再び国内に新たな風を巻き起こす事になるかもしれない。そうなれば、今や絶滅危惧種とまで囁かれている我々煉瓦職人の未来にも大きな希望が持てる。

煉瓦は誰もが手で握る事が出来る大きさで、そのサイズは地球上に煉瓦が発祥して以来数千年間ほとんど変わっていない。人類はまさに積み木と同じように煉瓦という直方体のシンプルな土の塊を手に掴み、積み上げては家を造り、橋を造り、城を造り、文化を造り上げてきた。我々煉瓦職人は、そうした先人に学び、そしてもう一度積み木遊びで夢中になった童心に戻り、煉瓦という素材の魅力を十分に活用し、技術を継承し、そして語っていかなければならない義務があると思っている。

勝浦市芸術文化交流センター Küste（キュステ）
（写真：フォワードストローク）